

PRESS

名古屋大学工学研究科ニュース
第3号

1997 No. 3

PRESS

名古屋大学工学研究科ニュース

編集発行：名古屋大学工学研究科 PRESS e 編集委員会
住 所：名古屋市中区不老町
電 話：052-789-3406（総務課庶務掛）
F A X：052-789-3100（総務課庶務掛）
印 刷：ニッソアイエム株式会社

1997 Jun.

工学を拓く。

流動型大学院システム完成



名古屋大学工学研究科長 稲垣康善

「平成9年度の抱負」



現在、産業をはじめとして社会のあらゆる分野において構造変革が進行しており、ますます高度な専門的知識・能力を持つ人材が広く求められています。特に新しい産業の創出や情報化、国際化、科学技術の進展など、大学院を中心とした独自の研究開発へ大きな期待が寄せられています。また、我が国が先進諸国と伍して競争力を維持していくためには、自らフロンティアを開拓することのできる創造性豊かな人材、起業家精神に富んだ人材を養成することが不可欠になっています。

このような社会の要請に応え、世界に貢献する指導的な「高級技術者・研究者」の育成を質的・量的に充実・拡大していくことは、基幹大学の工学系学部として、名古屋大学工学部の使命であり、世界をリードする先端的研究の拠点を目指した研究・教育の環境整備が不可欠であるとの観点から、本学では名古屋大学工学部独自の「流動型大学院システム（領域専攻群、複合専攻群とそれらを結ぶ併担講座）の構想のもとに、教育・研究の組織を学部から大学院に移行する組織改革（大学院重点化）を平成6年度から4年計画でスタートさせました。この平成9年度で領域18専攻、複合7専攻の25専攻140講座の体制が完成したところです。平成6年4月から開始された四年一貫の学部教育の上に流動型大学院システムができ上がり、高級技術者・研究者の育成を質的・量的に充実・拡大できる基礎ができたところです。

これに加え、平成7年度には工学部と極めて関係の深い学内共同研究施設として理工学総合研究センターが、平成8年度には名古屋大学ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（VBL）が設置されました。さらに、平成9年度には、難処理人工物研究センターが設置され、先端技術共同研究センターが大幅に拡充整備されました。このように我が国の先端研究・高等教育の拠点を指す名古屋大学工学部の機構改革も大きく進展し、名古屋大学に工学の教育・研究の一大拠点が形成されたと言つてよいと存じます。

今後は、領域専攻、複合専攻、各研究センターがその目的と役割を明確に認識し、質的・量的に研究・教育の高度化と充実を実現して、「科学技術基本法」を制定して科学技術立国を目指す我が国の将来に貢献する時です。大学院重点化計画に際して掲げた構想がいかに実現されているかを点検し、不断の改革の指針とし、その自律的努力によって研究・教育のますますの活性化・発展を図ることは当然ですが、同時に基幹大学としての責務を果たすためには、広く社会からの理解と他大学、諸研究機関及び社会・産業界との新たな連携協力を図っていくことが必須条件と存じます。

ご理解とご支援・協力をお願いする次第です。

CONTENTS

工学研究科長／稲垣康善 平成9年度の抱負	3
新評議員／山本 尚 今年度を駆ける	4
かわら版 懇話会・シンポジウム	4
工学部改革 流動型大学院システム完成！／ 流動型大学院システムとは？／ 21世紀の工学を目指して	5
DATA BOX 学科長・専攻主任名簿／各種委員会一覧／ 学生数	8
談話室 難処理人工物研究センター新設／ 先端技術共同研究センター拡充／	10
海外調査団派遣／ 新ごみ処理システム始動	11
研究と設備	13
かわら版 アーバンオリエンテーリング(UFO) 超大学空間ベンチャーホール	14
Challenge／川口竜太君 「空を翔(か)けて航空学を考える」	15

表紙イラスト／ハグルマクイイ

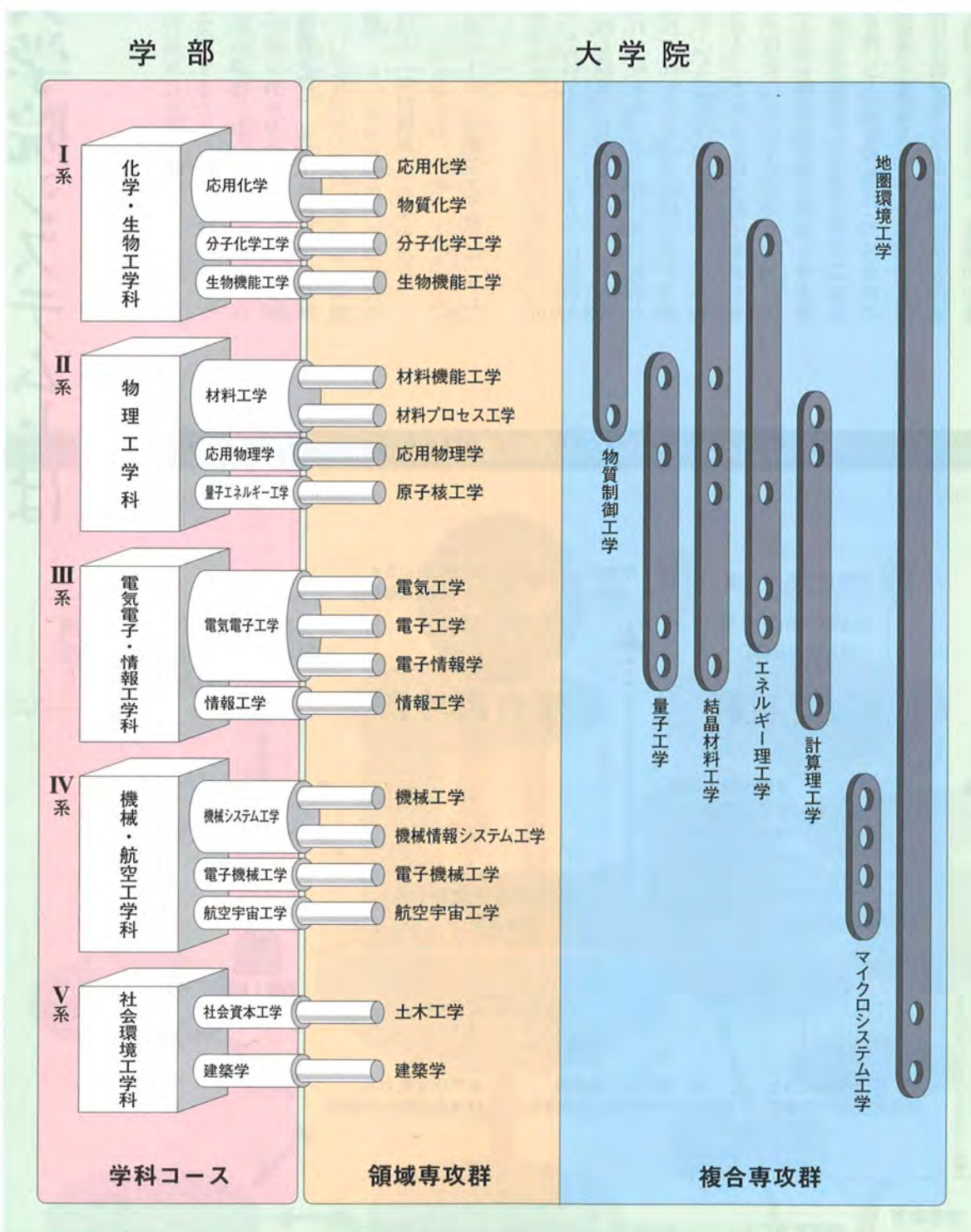
流動型大学院システム完成！ 21世紀の工学を目指して

「第3号発行にあたって」

名古屋大学工学研究科では、改革の状況及び教育研究活動を社会に発信し、大学と社会の連携を深めるための広報誌として平成8年から「PRESS e」を発行することになり、昨年度創刊号及び第2号を発行しました。平成9年度最初の号である第3号では、平成6年度から4年計画で進められてきた大学院重点化「流動型大学院システム」が平成9年度で完成したのを受けて、この改革を主テーマとして編集しました。また架谷昌信前工学部長のもとで進められた概算要求によって実現した新設及び拡充研究センターや工学研究科の様々な教育研究活動の紹介も行っています。学内外の方々に関心を持ってご覧いただければ幸いです。

平成9年度工学研究科
自己評価実施委員会委員長
後藤 俊夫

工学研究科流動型大学院システムの専攻構成



流動型大学院システムの構成

流動型大学院システムは、長年にわたって確立された基幹分野の研究を推進する18専攻から成る領域専攻群と、新しい学際分野を展開する7専攻から成る複合専攻群とから構成されています。領域専攻群は、I-V系に分かれ、各々学部学科グループと対応しています。複合専攻群は、VI系を構成し、数々の学部学科系からの入学の道が開かれています。

流動型大学院システム完成！

名 古屋大学工学部は他大学に例を見ない独特の「流動型大学院システム」を平成9年度に完成させ、名古屋大学大学院工学研究科としての新しい一歩を踏み出しました。こうした状況を踏まえ、この新しい器にふさわしい中身の充実を目指して、教務担当評議員として今後2年間全力を尽くして行きたいと願っております。具体的には四年一貫教育と大学院教育の本格的充実であります。すでに高度総合工学創造実験は平成8年度から試行に入り、ベンチャービジネスラボラトリーでの博士課程教育も始まりつつあります。こうした新しい試みを加味しながら、名古屋大学の工学研究科が世界における創造教育の一大中心となることを夢見ております。

山本 尚



所 属 生物機能工学専攻
講 座 名 生体機能物質化学講座
専門分野 生物有機化学、有機合成化学

新評議員／創造性教育の充実を 高木評議員とともに

懇話会・シンポジウム



研究評価方法、マネージメント教育に関して有益な意見交換を行った。

続いて、3月5日(水)、名古屋大学シンポジウムホールにおいて、「工学系大学院の戦略研究・マネージメント教育と社会貢献ーイギリス・フランスにおける実験と名古屋大学工学研究科改革の展望ー」と題するシンポジウムが開催された。当日は多くの参加者を得て、木村尚三郎東大名誉教授、ジョージオ教授、ルッソ教授による基調講演と、パネルディスカッションが行われ、盛会のうちに終了した。

平成9年3月4日(火)、名古屋大学グリーンサロン東山において、名古屋大学工学部懇話会が開催された。今回は、国際的な評価を受けることを目的として、初めて国外からも外部評価委員を招き、「流動型大学院システムとその将来発展戦略」と題するテーマで懇話会を行った。国外からは、英国マンチェスター大学のジョージオ教授及びフランス国立ボンゼリョッセ工科大学のルッソ教授に、国内からは丹保憲仁北海道大学総長及び企業関係者の方々にご参加いただき、上記テーマ、研

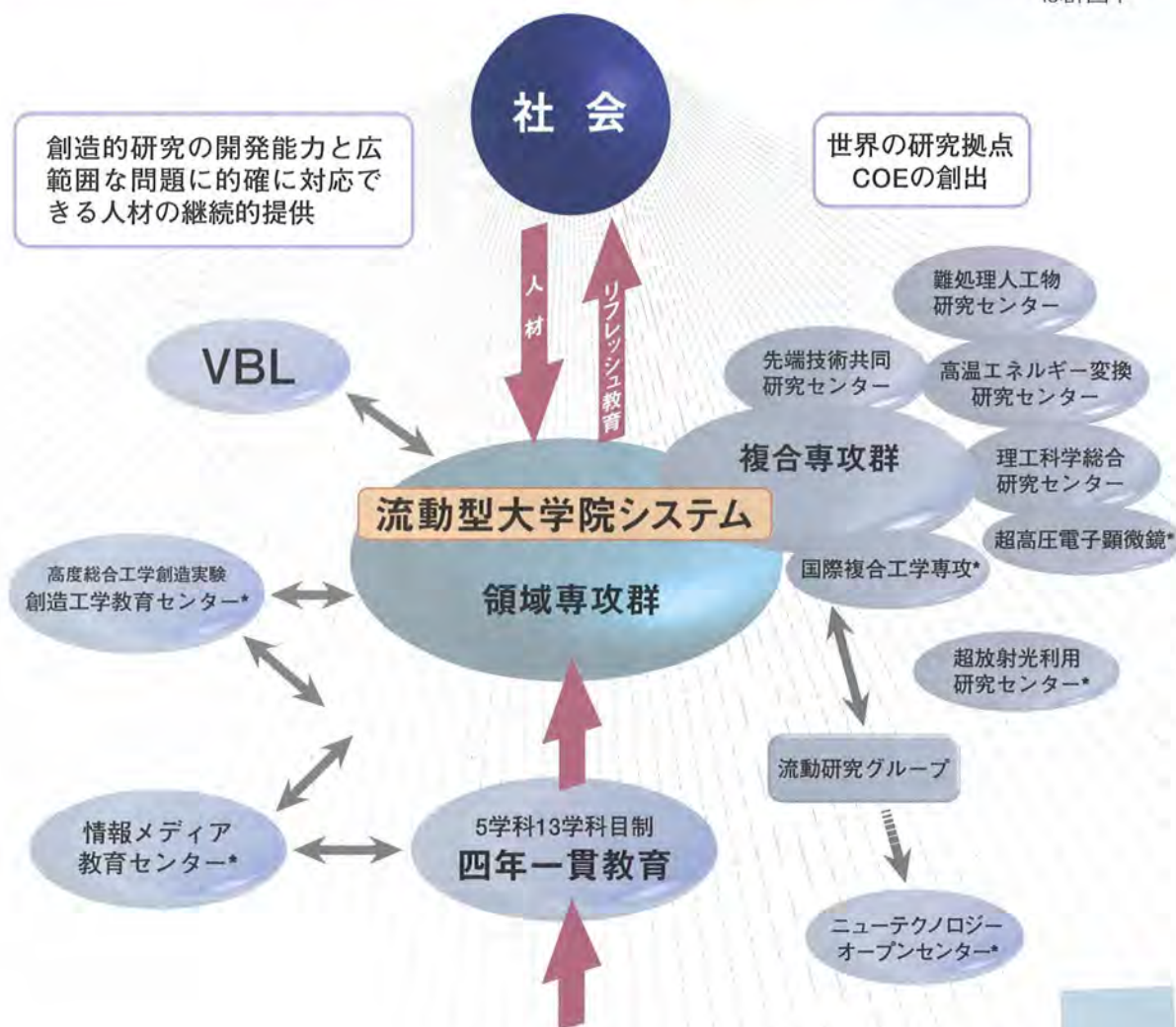
かわら版

名古屋大学工学部では、大学院を教育・研究の中心とする組織に変更する大学院重点化を進めてきました。そして、わが国でも唯一のシステムとして、領域専攻群と複合専攻群からなる「流動型大学院システム」を発足させました。このシステムを教育・研究の基幹組織としつつ、その周辺に戦略研究のための組織として理工学総合研究センター、高温エネルギー変換研究センター、難処理人工物研究センター、先端技術共同研究センターを擁する「流動型教育研究システム」を構築してきました。一方教育に関しては、大学院の創造性教育や社会人のリフレッシュ教育のための斬新な試みを実施してきたところです。

ベンチャービジネス・ラボラトリー（VBL）、創造工学教育センター（要求中）、情報メディア教育センター（改組要求中）と一体となって、積極的に創造教育の推進を図っています。

名古屋大学流動型教育・研究システム

*は計画中



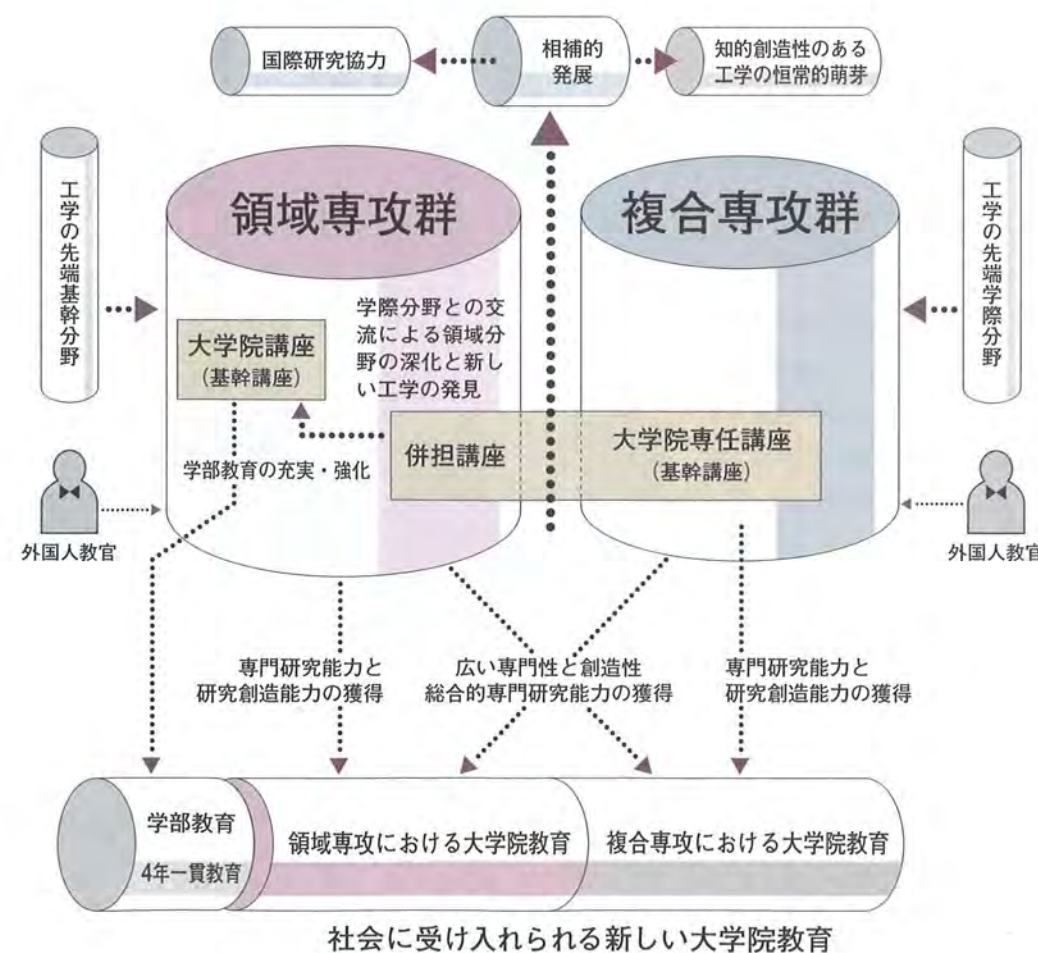
21世紀の工学を目指して

流動型大学院システムとは

工学の高度化と多様化に対応し得る大学院を実現するために、学部講座をすべて大学院の講座に移行するとともに、伝統的な学問分野の発展と強化・充実を図る「領域専攻群」、領域・学問体系を横断した新しい学際領域の研究を促進する「複合専攻群」、かつ両専攻群間の有機的連携協力を図る「併担講座」（領域専攻群に設置し、「複合専攻群」の教官が担当する）により構成する「流動型大学院システム」を導入しました。

「領域専攻群」、「複合専攻群」及び「併担講座」を設置することにより、伝統的な学問分野を継承・発展させつつ、それに支えられた産業等の諸分野に常に新風を吹き込む人材を安定的に供給します。また、こうした伝統的な学問分野に基礎を置きながら、それらを複合的に発展させる分野や将来において社会のニーズが極めて高くなる萌芽的分野を開拓し得る技術者・研究者を養成します。さらに「併担講座」を通じて「領域専攻群」の各専攻の内容を充実・強化するとともに両専攻群間における教官及び学生の流動化を促進して研究科全体を活性化し、多様かつ柔軟な研究・教育システムを積極的に体系化することによって高度の専門性と同時に総合力を有する人材育成を強力に推進することが可能となります。

流動型大学院システムの特徴



平成9年度学生数

●大学院学生

専攻	前期課程		後期課程			合計
	1年	2年	1年	2年	3年	
応用化学専攻	26	26	7	3	6	68
物質化学専攻	23	22		2	6	53
分子化学工学専攻	31	34	8	4	7	84
生物機能工学専攻	19	19	10	6		54
材料機能工学専攻	29	33	1	2	8	73
材料プロセス工学専攻	38	36	12	3	7	96
応用物理学専攻	23	31	1	4	3	62
原子核工学専攻	24	25	8	2	3	62
電気工学専攻	37	36	7	3	6	89
電子工学専攻	22	22	4	3	5	56
電子情報学専攻	28	36	7	12	1	84
情報工学専攻	37	54	7	6	6	110
機械工学専攻	34	30	3	3	7	77
機械情報システム工学専攻	23	27	1	3	2	56
電子機械工学専攻	32	32	2	6	5	77
航空宇宙工学専攻	25	28	4	3	4	64
土木工学専攻	28	31	6	5	3	73
建築学専攻	31	36	6	8	10	91
結晶材料工学専攻	35	25	7	4	7	78
地圏環境工学専攻	30	36		4	3	73
エネルギー理工学専攻	32	36	7	11	6	92
マイクロシステム工学専攻	33	33	9	3	5	83
量子工学専攻	34	34	10	7	10	95
物質制御工学専攻	36	41	6	9		92
計算理工学専攻	34		1			35
化学工学専攻					1	1
合計	744	763	134	116	121	1878

●平成9年度留学生国別総数

学部・研究科等 国名/区分	工 学 部			合計
	国 費	外 国	私 費	
中 国	9		86	95
韓 国	3		26	29
インドネシア	5	5	2	12
タイ	1	2	3	6
バングラディシュ	3			3
ミャンマー	1		4	5
アメリカ合衆国	1		3	4
マレーシア	2	8	1	11
フィリピン	2		1	3
スリランカ	1		1	2
ブラジル	1		1	2
イ ラ ン	1		1	2
ルーマニア	1			1
C I S (旧ソ連)			1	1
ネパール	1			1

●学部学生

学 科 名	1年	2年	3年	4年	合計
化学・生物工学科	169	169			338
物理工学科	209				209
電気電子・情報工学科	208	226	206		640
機械・航空工学科	187	212	193	194	786
社会環境工学科	99	97			196
機械工学科		2		34	36
機械情報システム工学科					
電 気 学 科					
電子工学科		7	8	168	183
電子情報学科					
応 用 化 学 科		12	76	93	181
物質化学科					
材料機能工学科		123	112	127	362
材料プロセス工学科					
分子化学工学科		4	50	62	116
航 空 学 科		1		11	12
応 用 物 理 学 科		67	52	72	191
土 木 工 学 科		8	48	55	111
建 築 学 科		1	51	62	114
原子核工学科		59	46	66	171
電子機械工学科				19	19
情報工学科		5	5	85	95
生物機能工学科		3	35	45	83
合 計	872	996	882	1093	3843

(注)この表は平成9年5月1日現在の在籍数(外国人留学生も含んだ総数)を表わします。

学部・研究科等 国名/区分	工 学 部			合計
	国 費	外 国	私 費	
ポ ー ラ ン ド	1		1	2
エ ジ プ ト	3			3
ベ ト ナ ム	1			1
シ リ ア	1			1
ブルガリア	1			1
モ ロ ッ コ	2			2
モ ン ゴ ル	1			1
ベ ル ギ ー	1			1
カ ン ボ ジ ア	1			1
ラ オ ス	2			2
サウジアラビア	1			1
ヴェネズエラ			1	1
イ ギ リ ス	1			1
パ キ ス タ ン	1			1
合 計	49	15	132	196

(注)この数字は研究生を含む。

平成9年度工学研究科長、評議員 及び周辺センター長・施設長名簿

区 分	氏 名
工 学 研 究 科 長	稲垣 康善
評 議 員	高木 不折
評 議 員	山本 尚
情報処理教育センター長	毛利佳年雄
先端技術共同研究センター長	早川 尚夫
高温エネルギー変換研究センター長	高木 不折
理工科学総合研究センター長	架谷 昌信
難処理人工物研究センター長	山内 睦文
ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー長	後藤 俊夫
廃棄物処理施設長	原口 紘丞

平成9年度工学研究科 各種委員会委員長名簿

委 員 会 名	委 員 長
学 科 長 ・ 専 攻 主 任 会	工学研究科長
改 組 委 員 会	工学研究科長
自己評価実施委員会	後藤 俊夫
教育体制委員会	八田 一郎
教 務 幹 事 会	山本 洋
整 備 委 員 会	浅井 滋生
キャンパス専門委員会	高井 吉明
工学部運営検討委員会	藤原 俊隆
国 際 交 流 委 員 会	末松 良一
予 算 ・ 決 算 委 員 会	工学研究科長
あ り 方 委 員 会	黒田光太郎
学 生 生 活 委 員 会	大熊 繁
安 全 委 員 会	工学研究科長
教室安全委員長会議	松井 正顕
図 書 委 員 会	中村 正秋
紀 要 編 集 委 員 会	中村 正秋
原 子 力 委 員 会	松井 恒雄
組換えDNA実験安全委員会	後藤 繁雄
実験実習工場運営委員会	大久保 仁
教育研究支援体制検討委員会	高木 不折

平成9年度学科長名簿

学 科 名	氏 名	内 線	研 究 室
化学・生物工学科	山根 隆	3339	新1号館7階
物理工学科	宮田 隆司	3235	5号館2階
電気電子・情報工学科	板倉 文忠	3171	5号館3階東
機械・航空工学科	早川 義一	2745	2号館1階南
社会環境工学科	清水 裕之	3745	4号館3階南

平成9年度専攻主任名簿

専 攻 名	氏 名	内 線	研 究 室
(領域専攻)			
応 用 化 学 専 攻	柘植 新	4664	新1号館10階
物 質 化 学 専 攻	伊藤 健兒	5112	旧1号館地階北
分子化学工学専攻	中村 正秋	3618	新1号館5階
生物機能工学専攻	山根 隆	3339	新1号館7階
材料機能工学専攻	宮田 隆司	3235	5号館2階
材料プロセス工学専攻	石川 孝司	3256	5号館2階
応 用 物 理 学 専 攻	坂田 誠	4453	3号館2階南
原 子 核 工 学 専 攻	井口 哲夫	4680	6号館特別実験棟
電 気 工 学 専 攻	毛利佳年雄	3307	2号館1階北
電 子 工 学 専 攻	平田 富夫	2725	5号館2階東
電子情報学専攻	板倉 文忠	3171	5号館3階東
情 報 工 学 専 攻	大西 昇	3309	9号館4階西
機 械 工 学 専 攻	藤田 秀臣	2700	2号館2階南
機械情報システム工学専攻	竹野 忠夫	3108	2号館2階南
電子機械工学専攻	早川 義一	2745	2号館1階南
航空宇宙工学専攻	梅村 章	4404	3号館1階北
土 木 工 学 専 攻	山田健太郎	4618	3号館1階北
建 築 学 専 攻	清水 裕之	3745	4号館3階南
(複合専攻)			
結 晶 材 料 工 学 専 攻	森田 健治	4686	6号館2階
地 圏 環 境 工 学 専 攻	西 淳二	5295	9号館3階
エネルギー理工学専攻	河出 清	3843	6号館2階
量 子 工 学 専 攻	水谷 孝	5230	5号館4階
マイクロシステム工学専攻	藤原 俊隆	4400	3号館1階北
物 質 制 御 工 学 専 攻	正畠 宏祐	4614	1号館3階北
計 算 理 工 学 専 攻	内川 嘉樹	3165	5号館5階東

*本学はダイヤルイン方式となっておりますので、789-(内線番号)を回していただければ、直接研究室につながります。

談話室

難処理人工物研究センター 新設される

本年4月1日、名古屋大学に「難処理人工物研究センター」が設置されました。本センターは、難処理人工物の解析システム、無害化処理、管理システムに関する4つのグループと1つの客員部門から構成されるが、国唯一のまったく新しい研究教育機関です。

本研究センター設立の趣旨は、現在、さまざまな方面において社会問題になっている廃棄物問題に関連して、今後、先端科学技術の発展に伴って創出される多様化、特殊化した難処理人工物の処理を可能とする科学技術を開発し、地球環境保全の立場から人類社会の持続的発展を目指すことにあります。

主な研究内容

- 難処理人工物の元素分析、状態・構造・形態計測、ならびに管理コンピュータシステムの構築
- 乾式・湿式ハイブリッド処理による化合物半導体、金属複合材料、シュレッターダストなどの無害化処理
- PCB、フロン、塩化ビニールなどの有機化合物、有害金属を含む浸した機能性セラミックスなどの完全分解処理
- 重金属、有機塩素化合物などで汚染された土壌および地下水汚染の微生物的、化学的、物理学的無害化処理法の確立
- 難処理人工物の原料採取、生産、流通、廃棄の各過程、ならびに無害化・処理技術を組み込んだ社会管理システムモデルの構築

大幅に拡充・改組された 先端技術共同研究センター

本年度から、名古屋大学先端技術共同研究センターは大幅に改組・拡充されました。先端技術共同研究センターは、昭和63年に大学における産学共同研究の推進母体

として発足しました。以来、産学共同研究の発展のために、様々な努力を重ねてきました。しかしながら、センターのスタッフとして助教授1人しかなく、大学が主体的

に取り組む産学共同研究を行うためには多くの困難がありました。平成9年、概算要求で、名古屋大学は全国の他の目標の共同研究センターに先駆けて、機能システム、知能システム、先端材料、環境・生命工学の4プロジェクト部門にそれぞれ教授1（全体で教授4）が認められ、本年度から新しい体制で発足することになりました。

このことは、今まで、センターの先端設備などのハードウェアの充実を行ってきたが、これからは大学が産学等の共同研究をコーディネートし、主体的に進めて行くための運営体制、すなわちソフトウェアが整えられたことを意味します。

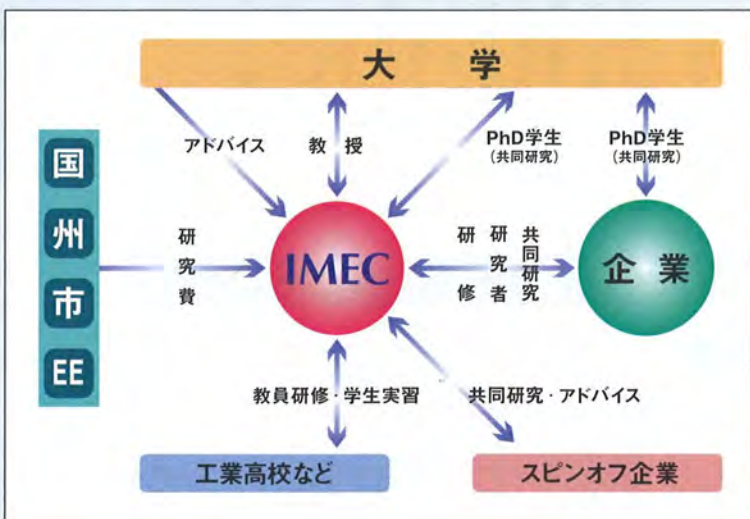
海外調査団派遣 テーマ「欧米における大学とベンチャービジネスの起業」

名古屋大学工学部の海外調査団派遣計画は、平成6年度の「工学教育におけるコンピュータ利用状況調査」に始まる。これは、大学院重点化がすすめられ、大学を取り巻く教育研究環境が急速な変革を

結成され、アメリカとヨーロッパ各国の実状を調査した。訪問先としては、ベンチャービジネスラボラトリープロジェクト「ナノプロセス技術」に関係のある、大学、公的研究機関のほか、これらの機関から実際にスピノフした企業など18カ所が選ばれた。

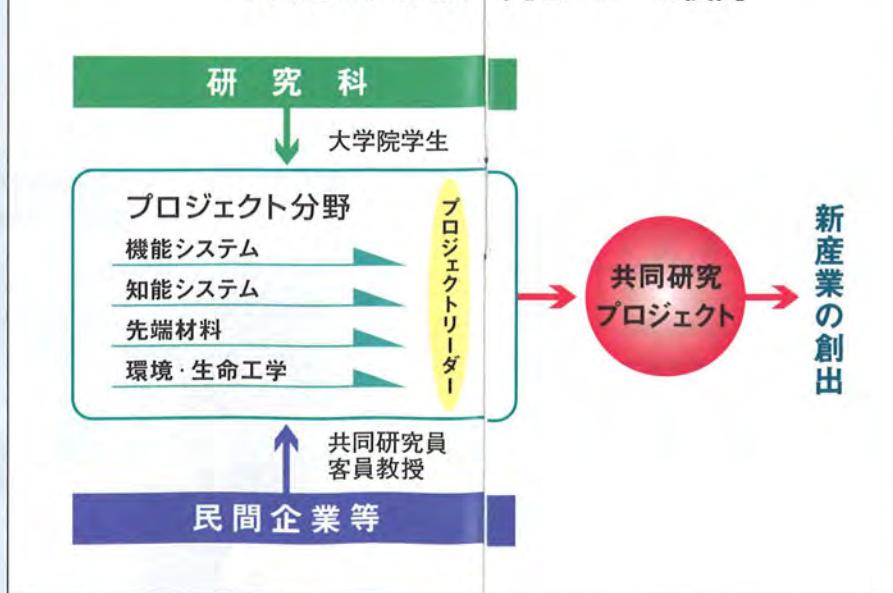
平成8年度は名古屋大学ベンチャービジネスラボラトリーが本格的運用に入っただけであった。表題のベンチャービジネスの起業と大学院学生に対する創造性教育のあり方に関する調査を行った。名古屋大学の教員・職員に文部省からの4名の参加を得て総勢14名による調査団が

また、今回は特に、創造性育成のための教育研究施設のあり方を調査項目に加え、研究施設のフロアプランを調査した。訪問先における討論内容など詳しいことは、報告書としてまとめられている。



ベルギー・フランドラース州では政府、大学と企業とが一体となってマイクロエレクトロニクスの振興に力を入れている。
IMEC: Interuniversity Micro-Electronics Center
図中のEEは、EU-Espritのことで、ヨーロッパ連合の科学研究資金を表す。

先端技術共同研究センターの役割



研究と設備



●構造物振動挙動実験システム・2軸振動台

中央台上のテーブル(1.5m角)で、水平・鉛直2軸で同時に任意の振動を発生する装置である。最大試験体重量2t、振動数範囲0~100Hz、変位±100mm、最大加速度1.1G(1t負荷時)の性能を持ち、大地震クラスの振動を忠実に再現することができる。地震時の構造物の振動挙動と損傷状況、設備や家具の転倒被害など地震時の安全性研究はもとより、地震動の体験と人間心理、振動測定機器の精度検討など幅広い研究に使用される。

松尾 稔 教授

●量子機能材料作製装置： 原子を積み上げて「新材料」を創る。



半導体レーザー(光通信やCD)や高周波デバイス(BS受信器や携帯電話)に広く用いられている「III-V族化合物半導体」を主として取り上げている。2インチ・ウエハ(直径5cmの半導体基板)上に、原子を制御しながら積み上げることが可能であり、新しい量子機能を示す「新材料」の創出が期待される。

竹田美和 教授



●RDF(廃棄物固形化燃料)の 発電用流動層燃焼試験装置

次世代エネルギー源として注目されるRDFによる高効率発電システムを実現するには、廃棄物に含まれる塩素分による高温腐食問題の解決と、環境汚染物質の排出抑制が不可欠となる。本研究室では、写真のベンチスケール流動層を設計・試作し、主にRDF燃焼時のHCl・NOx・SOxの生成挙動を化学発光・赤外吸収法などにより調べている。

森 滋勝 教授、藤間幸久 教授

新ごみ処理システム始動

—ごみ減量と資源回収をめざして—



デザインコンペの優秀作をもとに作られたごみ集積所の一つ(7号館北)

工学研究科ではごみ減量と資源回収に積極的に取り組んできたが、本年度からごみ処理システムを大きく変更した。各建物の近くに号館ごみ集積所を新たに建設し、各研究室から可燃ごみ、不燃ごみ、資源ごみに分別して搬入することにした。号館ごみ集積所からは委託業者によって分別回収が行われている。これまで研究棟の廊下に置かれていたごみ箱はすべて撤去され、3号館西側の工学部ごみ集積所は廃止された。

可燃物および不燃物はそれぞれ半透明の指定ごみ袋によって排出し、袋には研究室名を銘記している。紙類は資源ごみとして排出し、古紙回収を積極的に進めており、可燃ごみ量の低減を実現している。

この新ごみ処理システムについては整備委員会が昨年度1年かけて検討し、ごみ集積場は昨年10月に行われたデザインコンペの優秀作をもとに設計された。同時に行われたアイデアコンペの提案はシステムの運用に生かされている。

STEP UP辞典 工学部情報技術研修開催される



情報技術研修(第1期)が昨年5月から10月まで実施され、10名の技術職員が参加した。

この研修の目的は、急速に発展しつつある事務の電算化、情報ネットワーク化の趨勢に対応し、各教室や事務部等で新しく導入されるパソコン、ワークステーション、LAN等の初期設定及びシステム管理に対応出来る技術職員の養成である。講師には情報処理教育センター教職員、電気系及び情報工学科の教職員が担当し、講義とワークステーションの実習により充実した研修が行われた。

大学は戦後の学制改革以来の変革期を迎え、大きく変わろうとしています。流動型大学院システムが完成し、工学部ニュースとして誕生した本誌も工学研究科ニュースということになりました。教育、研究における変革はまだ続きそうです。21世紀に向けて大学における工学教育、研究はどうあるべきかなど皆様からのご意見も掲載していきたいと思っています。

【募集】

- 名古屋大学工学研究科について知りたいこと
- 紹介したい研究や装置がありましたら、記事と写真(できれば)
- 国際会議に関する記事
- ユニークな学生紹介(自薦・他薦は問いません)

連絡先: TEL 052-789-3406
FAX 052-789-3100
E-mail:
press-e@lib.engg.nagoya-u.ac.jp

Challenge

「空を翔(か)けて航空学を考える」

川口竜太君(航空宇宙工学専攻博士前期課程2年)



ライダーの空力抵抗の風洞実験中の川口竜太君

幼い頃から大空に憧れ航空学科に入学した川口竜太君は、空を翔けて航空学を考えている。趣味で始めたパラグライダー(スカイスポーツの一種)のプロ級の乗り手であり、また、豊橋チームの人力飛行機の製作に参加し、昨年の鳥人間コンテスト人力飛行機部門では1000m飛んで5位に入賞した。卒論を引き継いで修論でもパラグライダーの性能向上を目指した理論・実験的研究を行っており、今では体験学習と研究成果を活かしてスカイスポーツ誌に単独で連載記事を書く立派なスカイスポーツ科学専門家である。雑誌の記事はまとめて単行本に出版される計画があり、一部の記事は、親元の国際誌に英訳されて世界に研究成果が伝えられるという。

大学には自由な思考ができる学生の養成が求められている。興味の赴くまま、自ら研究課題を設定し研究する優秀な学生の存在は大いに意を強くしてくれるものである。

梅村 章 教授

STEP UP辞典 '粒が揃っている' 新1年生

新高等学校学習指導要領(平成6年から学年進行)による教育を受けた学生が今年の1年生に入学してきた。大学における教育のあり方を考える上でどのような教育を受けた学生が入学してきたかは、大いに興味がある。新指導要領の下での教育を受けた学生に対して調査を実施したところ、なんと100%!の学生が数学I、II、III、A、B、およびCの6科目すべてを履修していることが判った。理科についても、物理IBおよび化学IBをほとんどの学生が履修しており、物理Iおよび化学Iをほぼ95%の学生が履修している。



英語については、英語IおよびIIを90%を超える学生が履修しており、リーディングおよびライティングを85%を超える学生が履修している。さらに、オーラル・コミュニケーションについては、Aについては50%を超える学生が履修している。Bについても半数近い学生が履修している。オーラル・コミュニケーションに相当する試験科目は現在無いにもかかわらずこれほど多くの学生が学んできていることは注目すべきことである。

アーバンフロンティアオリエンテーリング(UFO) 都市の新たな魅力を体験



平成9年3月26(水)~28(金)の3日間、「好奇心旺盛な高校生」40名を募り、上記セミナーが社会環境工学科で開催された。テーマは、社会を基盤から支える最新の技術、人に優しく生活を守る工学、都市の歴史とデザインなど多彩で、特別講義、現地見学会、さらには少人数のゼミ形式による実験や演習が行われた。アンケートによれば、参加者からも好評を得られ、エンジニアリングへの興味を喚起し、大学生活の一端を体験してもらうことができた。

超大学空間 ベンチャーホール



ベンチャープラザ(新1号館北側の4階建て)の3階にあるベンチャーホール(会議室)は、ゆったりとした雰囲気のあるラウンジ(研究交流室)に隣接した講演などのためのスペースで、大学院の特別講義の会場としても良く利用されている。ベンチャーホールやラウンジは、これまでの大学にない開放的で刺激にあふれたスペースといえよう。一体的な使用も可能で150名程度のイベントにも対応できる。

「従来の大学の講義室のイメージとは異なる良好な環境で、講演会などには最適ではないか。ただ、備え付けのAV設備は若干使い勝手が悪い」とは特別講義をされた先生の感想である。一方、受講していた学生からは、「話がよく聞こえる」、「研究紹介のビデオが素晴らしかった」など当然かも知れないが講義に関連した感想が返ってきた。